

テーマ：自由ってなんだろう？

開催日：2019年5月15日（水）

開催内容：

今回は一般の参加者以外に、帝京大学からファシリテーター役である本学宇都宮キャンパス総合基礎科目講師 江口建、同科目講師 津村健太、本学サイエンスらいおん客員研究員 藤平昌寿が参加しました。また、テーマは、ある参加者の家庭での子どもとの会話がきっかけになっています。

「どうして引力があるのに人は自由に動くことができ、無重力だと上手に動けないのか」

親子で地球の引力について話をしているときに尋ねられ、その着眼点のおもしろさから、大人だったらどうい話し合いになるだろうかと興味を持たれてご提案くださいました。さまざまな方向に展開できる話題です。自由とは何か、どのようなときに人は自由を感じるのか、自由の条件とは何か、はたして自分は自由なのか。対話の最後には「ファッション」や「盆栽」に触れ、「美と不自由」の関係まで話がおよびました。

■不自由とは、どういう状態か？

対話は、一人の参加者の「高校時代の自分は不自由だった」というエピソードから始まりました。大家族で暮らす中で、自分に期待される役割を意識するあまり、自分が見えなくなっていたそうです。箱に入られていると感じていたが、今振り返ると自分で自分を箱に入れてしまっていたのかもしれない、と感想を述べました。「不自由ってなんだろう」と問いかけてみると「箱入り状態」「押し付けられているイメージ」などの答えが返ってきました。

ある参加者が、「自分の息子は不自由を感じているのではないか」と心配を口にしました。その参加者の子どもは特に箱に押し込まれているわけではありません。何かを押し付けられているということもなく、はたから見るとむしろ自由に見えます。しかし、ある理由でもしかしたら不自由を感じているのかもしれない。たとえば、学校に行かずに、一日中家で好きなことをして暮らすことは自由でしょうか。反対に、毎日学校へ行かなければならないことは不自由でしょうか。家で好きなことをして過ごせる子どもは、一見自由に思えます。しかし、家にこもってばかりいると社会的な繋がりがありません。家にいることで世界が限定されています。狭い世界の中で自由に振る舞っていますが、それは「とても狭い自由」である可能性があります。古代ギリシャの哲人であるプラトンは、それを「**洞窟の比喻**」を用いて説明しました。生まれたときから洞窟の中で暮らしており一度も洞窟の外に出たことのない人びとは、焚火の火によって壁に映し出された影絵を見てそれが世界のすべて（リアルな世界）だと思い込みます。しかし、洞窟の外に出て太陽の光を見たとき、実は自分たちが見ていた光景が影絵にすぎなかったことを知ります。そのとき、本当の「自由」の意味を知るのです。

また、本当は学校に行き友達と繋がりたいと思っている場合、何らかの理由で学校に行けない子どもは、たとえ「学校に行かなくてもいい」「家で好きに過ごしていい」と言われても、心は自由ではないかもしれません。もしかすると、家で遊んでいる間もずっと心のどこかで不自由を感じているかもしれません。この場合、不自由というのは、「**しなければならないことがある**」状態ではなく「**しなければならないのに、それすら何らかの理由で「できない**」状態のことなのかもしれません。

これが、「生き辛さ」に関係してくる可能性があります。

ここから、「心（精神）の自由」と「身体の自由」を区別して考える、という視点が得られました。身体が自由でも心が自由ではないことがあります。反対に、身体が拘束されていても心は自由なこともあります。たとえば、信仰に生きる牧師や僧侶は不自由でしょうか。私生活や行動様式にいろいろな制約があるという意味では、身体的には不自由とも言えるかもしれませんが、しかし、信仰によって心が神と繋がっている点で、心は誰よりも自由かもしれません。逆の考え方もありえます。奴隷や囚人とは異なり、普通の人のように暮らせるため身体的には自由ですが、神との契約を結んでいるので心は不自由だ（心のあり方を指定されている）とも言えるかもしれません。

■全てが自由だったら？

ここで「全てが自由だったらどうか」という問いかけが出ました。法律も、ルールも、道徳も、仕事も、責務も、何もない状態です。「嬉しい」という意見と「不安だ」という意見に分かれました。「不安だ」と答えた人は、「宝くじに当たってしまったときのようだ」と説明しました。「どうしたらいいかわからない」ということです。また、別の人は、「永遠の命を授かったら不安になる」と述べました。すべてが自由になった瞬間、人はその自由をどのように使ったらいいかが分からず不安になるようです。またすべてが自由だと、自分の自由を侵食される恐怖もあるようです。では、適度に制限されていたほうが生きやすいのでしょうか。

ある参加者が、「人類の唯一絶対のルールは無敵がないこと」と述べました。有限性の中で自由を獲得するのが人間ではないか、ということでした。最初から無限であれば人は自由を感じない。制限があるからこそその自由です。

たとえば、スポーツにルールがなかったらどうでしょうか。全く成り立たなくなります。サッカーがサッカーとして成り立つのは、サッカーの「ルール」があるからです。自由は「無法」とは違います。決められたルールや課せられた目標の中で、最大限に自由にプレイをする。それがスポーツです。

■自由と抑圧の関係

そうすると「自由であるためには、まずは自分を抑圧するものがなければならない」という視点が得られます。ここから、自由とは抑圧に対する押し返しではないだろうか、という意見が出ました。抑圧への抵抗こそが自由を生み、それが自己肯定や自信に繋がる、ということでした。抑圧はさまざまな形で表れます。社会は抑圧だらけです。しかし、その抑圧を一杯押し返したときに、人は自由を手に入れるのかもしれませんが、最初から「なんでもあり」の無法地帯では、人は本当の自由を実感できないのかもしれませんが、自由でありたいからこそ、しがらみを必要とします。

「社会的な繋がり」は、ときに「しがらみ」となります。気が乗らないイベントへの強制参加や身の回りにある人付き合いなど、これらが過度になると、心理的抑圧や生活圧迫となります。本当はお互いに助け合い、連帯感を生むためであるはずの相互扶助の精神が、半ば強制化されることによって、「不自由」と感じます。その一方で、共同体のルールがなければ人は自分のペースやスタイルで好き勝手に暮らし始め「共存」が難しくなります。「共に暮らす」ためには規範が必要です。最初から無人島で一人暮らしをしている人は、そもそも「自由だ」とすら感じないかもしれません。自由を求めることも、自由を主張することもないでしょう。まず自分を抑圧する規範があり、その規範が妥当かどうかを見極め、「不当」だと判断される規範を「押し返す」ことに成功したときに、自由が手に入るのかもしれませんが。

このように考えると、自由であるためには社会的な繋がりを必要とし、社会的な繋がりが無い人は、その見かけに反して不自由なのかもしれないという考えが浮かんできます。なぜなら、自由とは、抑圧への抵抗、閉じ込めからの脱出として成立するからです。そうであれば孤独な人、家の中に引きこもって外に出られない人、何らかの理由で登校拒否になった人、社会で働くことに意義を見出せない人などは、一見面倒くさい「社会的関係」をすべて断ち切って「自由気ままに」生きているように見えますが、そんなことはなさそうです。そのことに気づいて関心の眼差しを向ければ、もう少し優しい社会を実現できるかもしれません。

「**抑圧と抵抗のバランス**が大事かもしれない」という意見も出ました。抑圧が強すぎると不自由を感じ（いくら抵抗しても自由になれない）、一方で、抑圧が弱いとただの無法になります。また、**選択肢**があることの重要性も指摘がありました。抑圧や制限がただ一つの行動しか許してくれないとすれば、それは、とても窮屈な世界です。抑圧の中にあっても、その抑圧を脱する**選択肢**が複数用意されていることが大事かもしれません。

そのほか、「**枠組みの設計**が大事」という意見も出ました。枠組みが悪いと自由を封じ込め、人間を押さえつける檻となります。しかし、程よい枠組みを上手に作ることができれば、それに対する抵抗またはそこから脱出としての努力やがんばりが生じ、自由や解放感を得られるのではないかと、という意見です。宗教や学校、各種の社会的ルールなど、それぞれ「枠組み」の作り方を考える必要性を実感しました。抑圧と押し返しのバランス、**選択肢**の重要性、**枠組みの設計**の大事さ——ここから、「自由ではなく**自由度**が大事ではないか」と、ある参加者が述べました。自由とは0か100かではなく、「度合い」が大事であるという意見です。

■不自由と美

興味深かったのは「**不自由と美**」の関係についての意見です。たとえば**ファッション**。ファッションとは、ある意味不自由な行為です。女性が冬場に寒さを我慢してはいているミニスカートの、歩きにくいハイヒール、中世ヨーロッパでは苦しくてご飯が食べられないような貴婦人のコルセット、時間をかけて化粧をすること、こんなにも不自由なのにそれでも人は美を求めます。不自由さを我慢して自分なりの美を表現しようとしています。しかし、この不自由さの中にこそ、自由な美の表現があるのかもしれません。

さらに、**盆栽**も話題に上りました。盆栽を趣味にしている参加者によれば、盆栽の植物は不自由だそうです。しかし、その不自由さの中に美を見出すことこそが盆栽だそうです。この技巧性は、「里山」とも似ているのかもしれません。

そうすると、冒頭で紹介したこのテーマの元々のきっかけであった「どうして引力があるのに人は自由に動くことができ、無重力だと上手に動けないのか」という疑問には、次のように答えられそうです。

人が自由に動くことができるのは「引力」という「抑圧するもの」があるからです。必死に引力を押し返そうとして頑張るから、私たちは自由なのだ、と言えます。無重力空間では抑圧するものがないため、人はうまくバランスが取れないのかもしれません。

■「便利であること」の不自由

「自由／不自由」とは何かをさまざまな角度から考えた対話となりました。

現代は、物があふれた便利な時代です。一方で、「便利さ」は決して「自由」ではないと感じます。物が

あふれているせいで、私たちは余計に不自由になっていると感じる局面も少なくありません。ドイツ語に「die Qual der Wahl (選択の苦しみ)」という言葉がありますが、これは、選択肢がありすぎて選ぶ際に困るという意味です。

ビデオや DVD などの録画機器がなかった頃は、まさにそのときに番組を観なければならなかったため、その時間帯にテレビの前に座っていなければならない点では不自由でした。録画機器が普及すると、時間があるときにいつでも自由に番組を観ることができますが、たとえば、忙しく観る時間がないまま録画した番組ばかりが溜まっていき、あっという間にハードディスクが容量いっぱいになり、DVD-R にダビングしてはラベルを貼る、というその作業の繰り返しに頭を抱える、といったことがあるかもしれません。ダビング作業と整理・保管でかなりの時間を取られますが、この作業を諦めれば、ハードディスクはすでにいっぱいなので、これ以上ダビングはできません。つまり、物にとらわれ自ら不自由になっているのが現代人である、とも言えます。便利さを手に入れる代わりに自分で自分を不自由に追いこんでいる側面があるように思えます。

もっと身近なものでたとえれば携帯電話 (スマートフォン) があります。もはや現代人はスマートフォンの奴隷と言っても過言ではありません。片時もスマートフォンを手放せなくなっている人びとを見て、とても不自由だな、と感じることがあります。スマートフォンを自由に使いこなしているように見えて、じつはスマートフォンに使われている若者がとても多いと感じます。そうした中、「ノー・スマホデー」や「スマホ断ち合宿」といった試みを行っている学校もあります。

今の日本には、古代ギリシャやローマのような奴隷制もなく、人びとには自由と権利が与えられています。しかし、私たちは本当に「自由」なののでしょうか。ゲームを好きなだけやらせることが自由を与えるということなののでしょうか。学校や仕事に行かず、家で毎日好きなことをして暮らせることが自由なののでしょうか。なんでも手に入ることが自由の証なののでしょうか。

引き続き考えることがたくさんあることを確認し、対話を終了しました。

